

【漁況】

[マアジ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トンにピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30万トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成29年は14万5千トンとなりました。

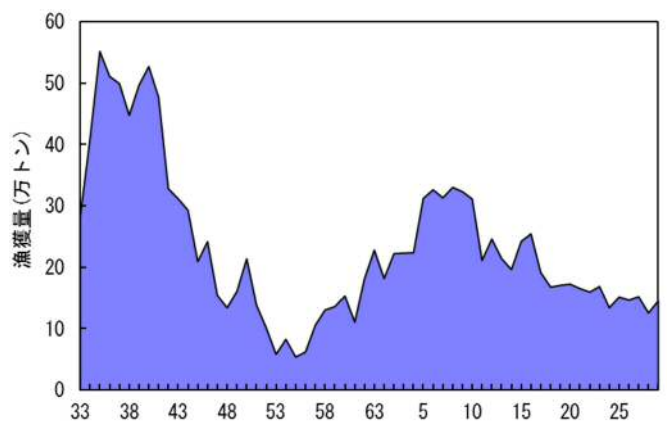


図 全国のマアジ漁獲量の推移

2. 県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島周辺でマアジ仔、豆（1歳魚：平成30年生まれ）主体に漁場が形成されました。

薩南海域では、志布志沖でマアジ豆（1歳魚：平成30年生まれ）主体に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で332トンの水揚げで、前年の32%及び平年の26%となりました。

3. 県内の平成31年4～6月期の見とおし

漁獲の主体はマアジ豆、小（1, 2歳魚：平成30, 29年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年並で、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターン等から予測しました。

来遊量は、漁獲量の分析により予測しました。前期（1～3月）と今期（4～6月）の漁獲量に正の相関があることから、これをもとに予測すると今期の来遊量は前年並で、平年を下回ると考えられます。

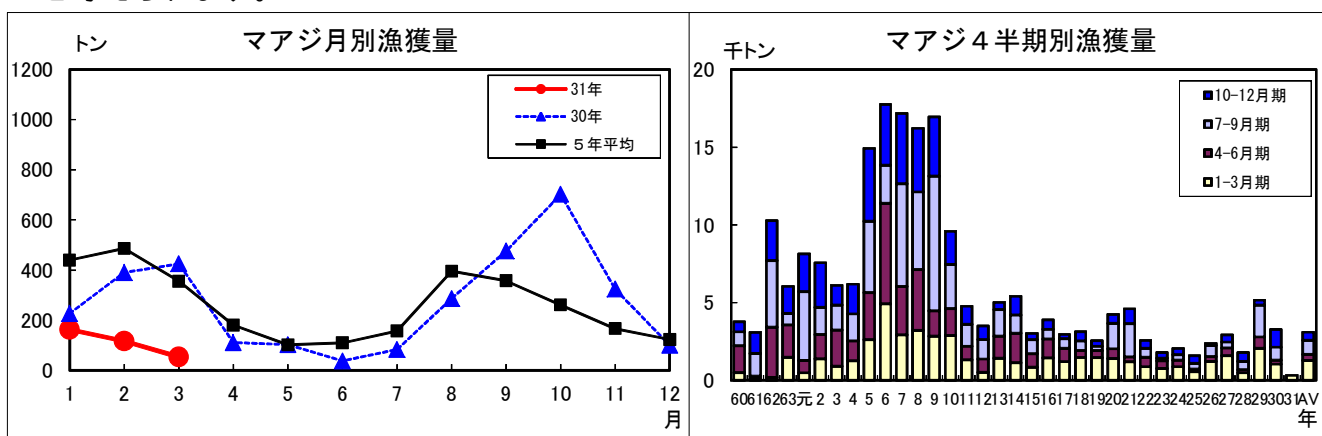


図 マアジまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成31年3月27日までの水揚量を使用

[サバ類]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のサバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トン进行ピークに年々減少し、平成3年には26万トンとなりました。

平成5年から増加に転じ平成9年には85万トンとなりましたが、平成14年には28万トンまで減少しました。

平成18年に65万トンまで増加したあと減少傾向となりましたが、平成29年は51万8千トンとなりました。

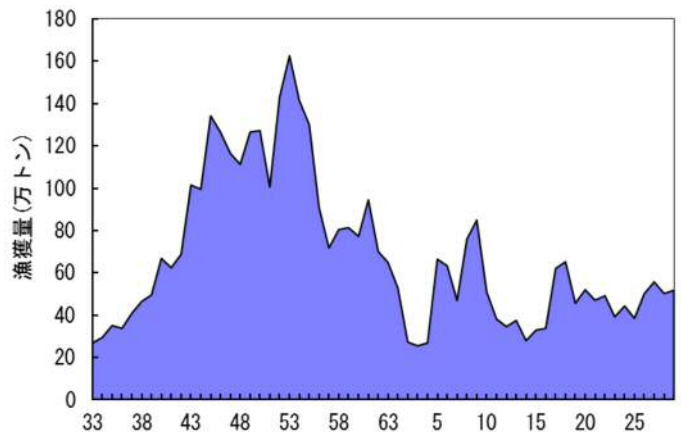


図 全国のサバ類漁獲量の推移

年

2. 県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島周辺でサバ類小、中（1～3歳魚：平成30～28年生まれ）主体の漁場が形成されました。

薩南海域では、1、2月に馬毛島でゴマサバ中（2～5歳魚：平成29～26年生まれ）主体の漁場が形成されました。3月に志布志沖でマサバ中小（3～6歳魚：平成28～25年生まれ）主体の漁場が形成されました。

4港計のまき網では、期全体で8,430トンの水揚げで、前年の168%及び平年の155%となりました。

3. 県内の平成31年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ中（2～5歳魚：平成29～26年生まれ）でしょう。

来遊量は、前年・平年並でしょう。

（根拠）

今期は、産卵群と考えられるゴマサバ2～5歳魚が漁獲の主体になります。

来遊量は、漁獲量等の分析により予測しました。今期（4～6月）は、前期（1～3月）の漁獲量と正の相関があり、前期に来遊した産卵群が継続して漁獲対象になると考えられます。また、3月に多獲されたマサバも引き続き漁獲される可能性があります。これは太平洋側からの南下群と考えられ、南下する量や時期の予測は困難です。以上を考慮して予測すると、今期の来遊量は前年・平年並であると考えられます。

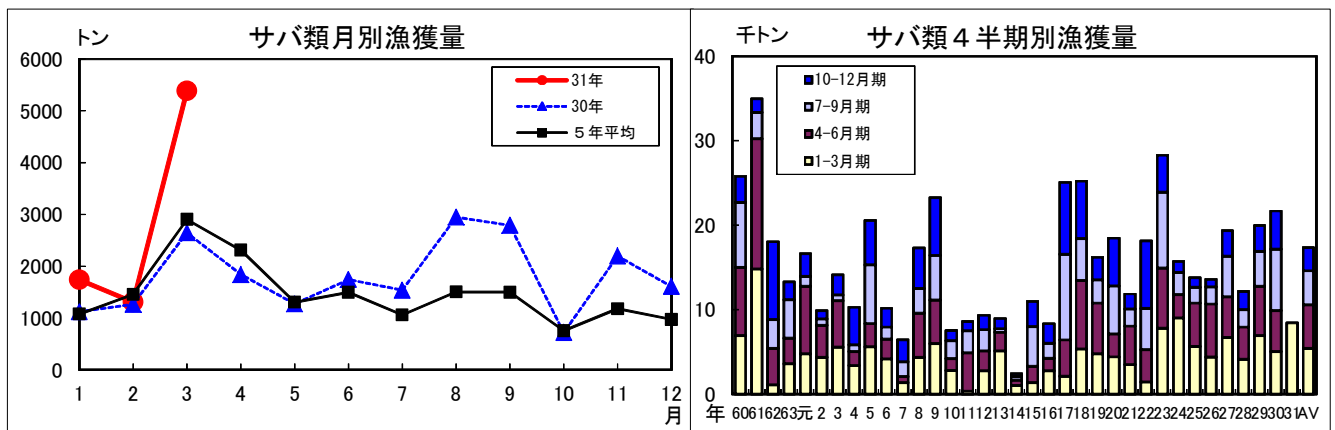


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成31年3月27日までの水揚量を使用

[マイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

平成元年以降、全国的に漁獲量は減少を続け、平成14から22年までは、10万トンを下回る低い水準で推移していましたが、平成23年以降は10万トン以上に増加しました。

さらに、平成25年以降は20万トンを超える漁獲が続き、平成29年には50万トンとなりました。

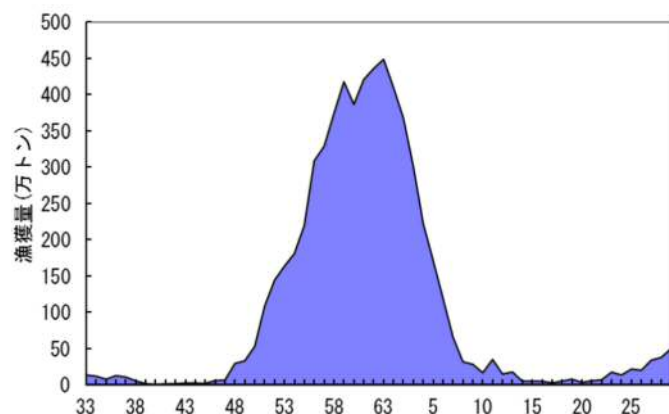


図 全国のマイワシ漁獲量の推移 年

2. 県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域、薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網、北薩海域の棒受網では、水揚げはありませんでした。

3. 県内の平成31年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、小羽（0歳魚：平成31年生まれ）でしょう。

来遊量は前年・平年を下回るでしょう。

（根 拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる0歳魚（平成31年生まれ）は、前年と同様に1～2月に産卵親魚と考えられる1歳魚の水揚げがなく、良好な加入は見込めないため、来遊量は前年・平年を下回ると考えられます。

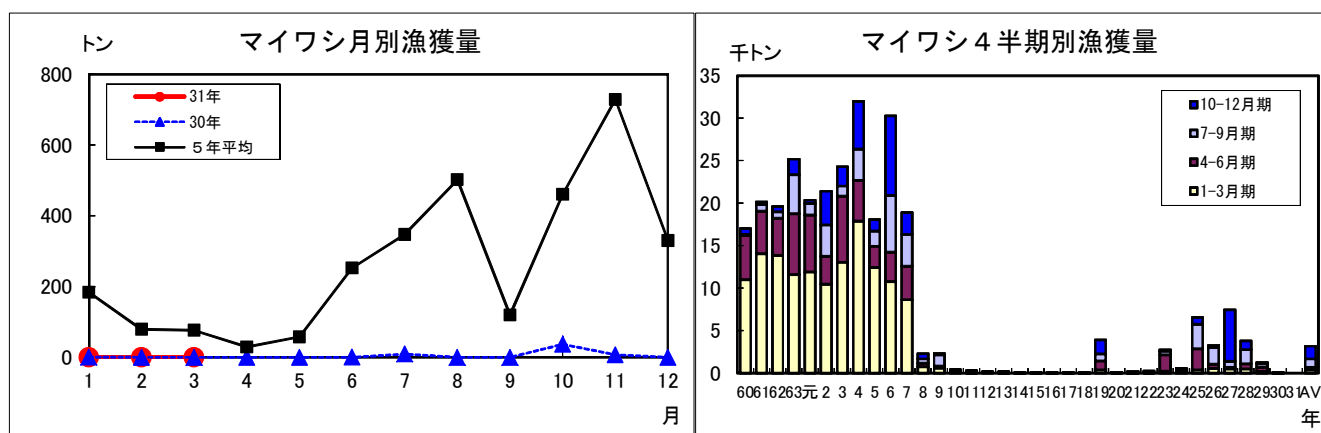


図 マイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成31年3月27日までの水揚げ量を使用

[ウルメイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は、昭和30年代以降、増減を繰り返しながらも増加傾向を示し、平成6年に6万8千トンとピークを迎えた後、減少傾向に転じ平成12年には2万4千トンまで減少しました。

平成15年以降は再度増加傾向に転じ、平成28年は9万8千トンで昭和33年以降では最高の漁獲量となり、平成29年は7万2千トンと減少したものの、高い水準を維持しています。

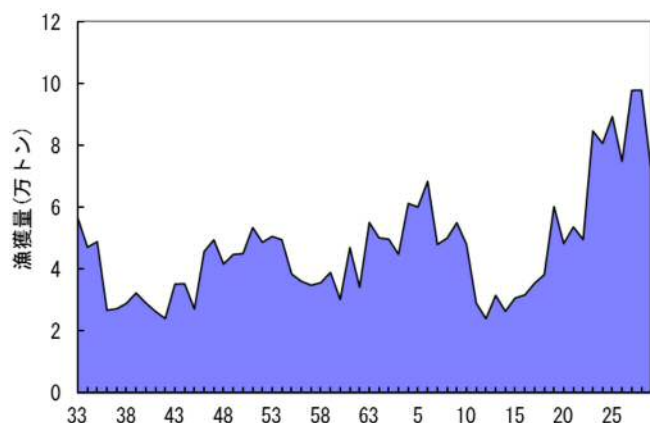


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、甑島周辺で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、内之浦沖、野間池沖、志布志沖で漁場が形成されました。

4港計のまき網では、中～大羽（1歳魚：平成30年生まれ）主体に150トンの水揚げで、前年の36％、平年の16％でした。

北薩海域の棒受網では、水揚げはありませんでした。

3. 県内の平成31年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、4月は中～大羽（1歳魚：平成30年生まれ）、5月以降は小羽（0歳魚：平成31年生まれ）でしょう。

来遊量は前年並で、平年を下回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる1歳魚（平成30年生まれ）は、前期が低調な漁模様であったことから、今期の漁も低調となると考えられます。また、5月以降に漁獲加入する0歳魚（平成31年生まれ）は、産卵親魚が来遊する冬季に低調な漁模様であったことから、良好な加入は見込めないと考えられ、総じて来遊量は低調だった前年並で、平年を下回ると考えられます。

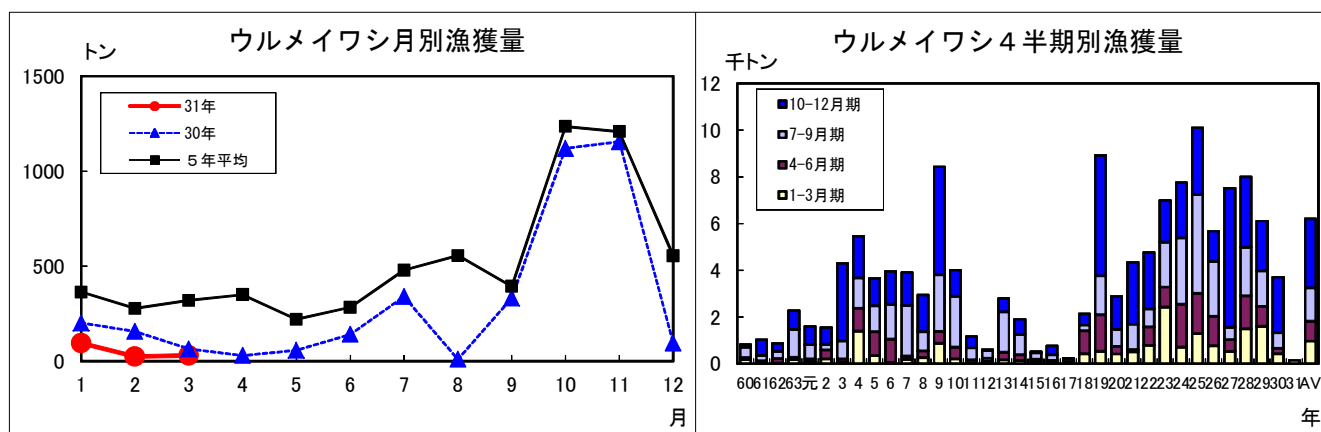


図 ウルメイワシまき網漁獲量変化（4港計）

※平年値は過去5年の平均値（AV）、平成31年3月27日までの水揚量を使用

[カタクチイワシ]

1. 全国の漁獲量の動向（農林統計）

全国のカタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。

その後は大きく増減を繰り返しながら増加傾向にあり、平成15年は過去最高の53万5千トンとなりましたが、その後減少傾向に転じ、平成29年は14万6千トンとなりました。

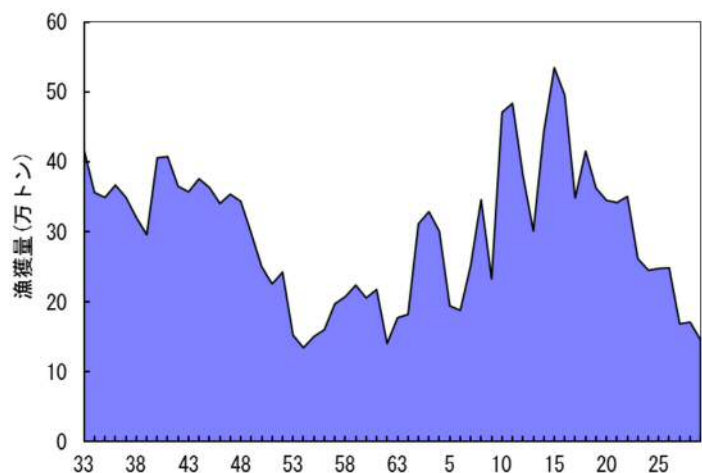


図 全国のカタクチイワシ漁獲量の推移

2. 県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域のまき網では、長島（内海）で漁場が形成されました。

薩南海域のまき網では、漁場は形成されませんでした。

4港計のまき網では、小～中羽（平成30年生まれ）主体に44トンの水揚げで、平年の6%でした（前年は水揚げがなかったため、比較できず）。

北薩海域の棒受網では、阿久根沖、長島沖、長島（内海）で漁場が形成され、207トンの水揚げで、前年の130%、平年の154%でした。

3. 県内の平成31年4～6月期の見とおし

漁獲の主体は、中羽（平成30年生まれ）でしょう。

来遊量は前年を上回り、平年並でしょう。

（根拠）

漁獲の主体と来遊量は、現在の漁況経過や近年の漁獲パターンから予測しました。

今期の漁獲の主体となる中羽（平成30年生まれ）の漁況は、前期に前年を上回る漁があり、県内の前年シラス秋漁も前年並の漁があったことから、来遊量は低調だった前年を上回り、平年並と考えられます。

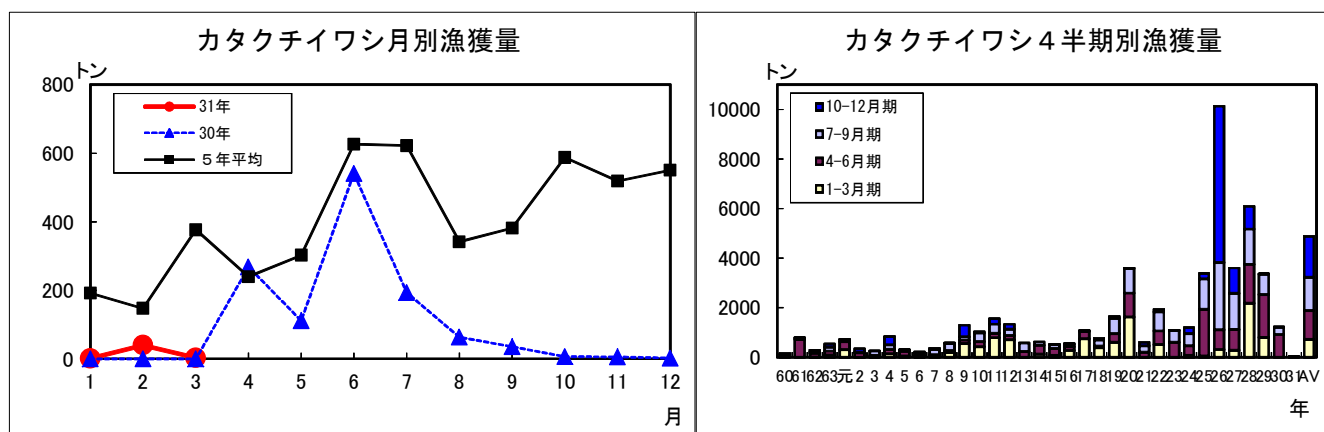


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV)、平成31年3月27日までの水揚量を使用

[イワシ類参考資料]

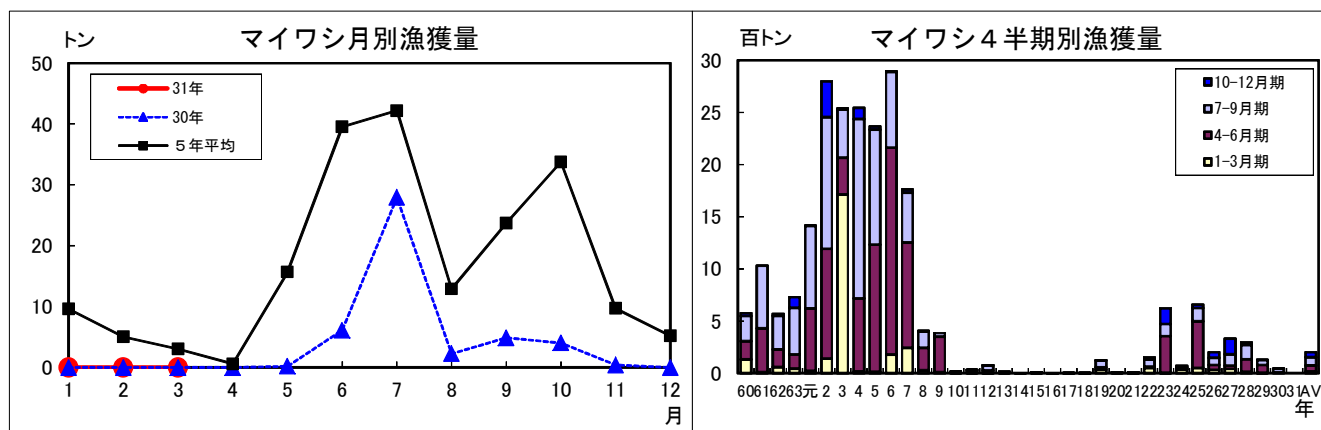


図 マイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

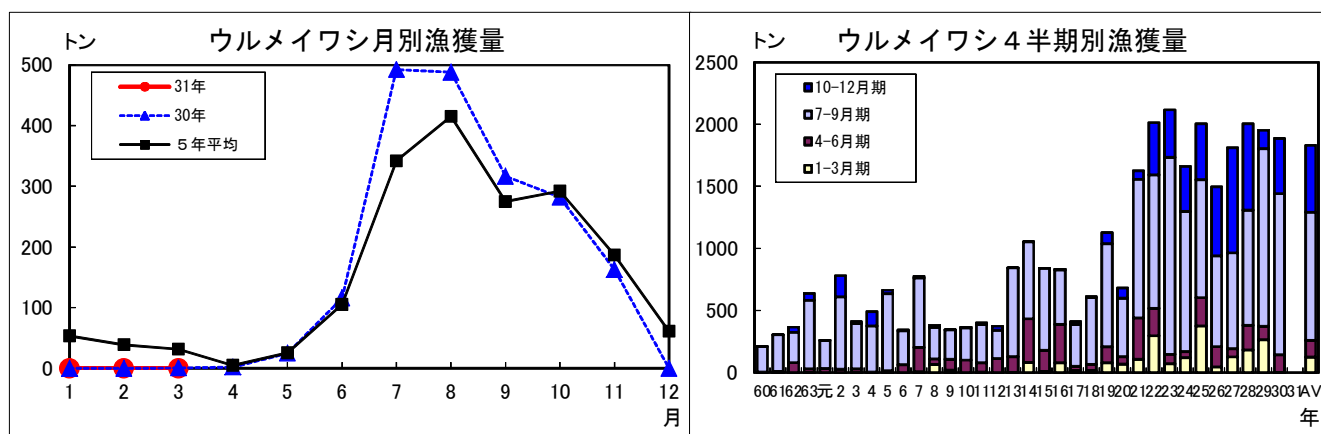


図 ウルメイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

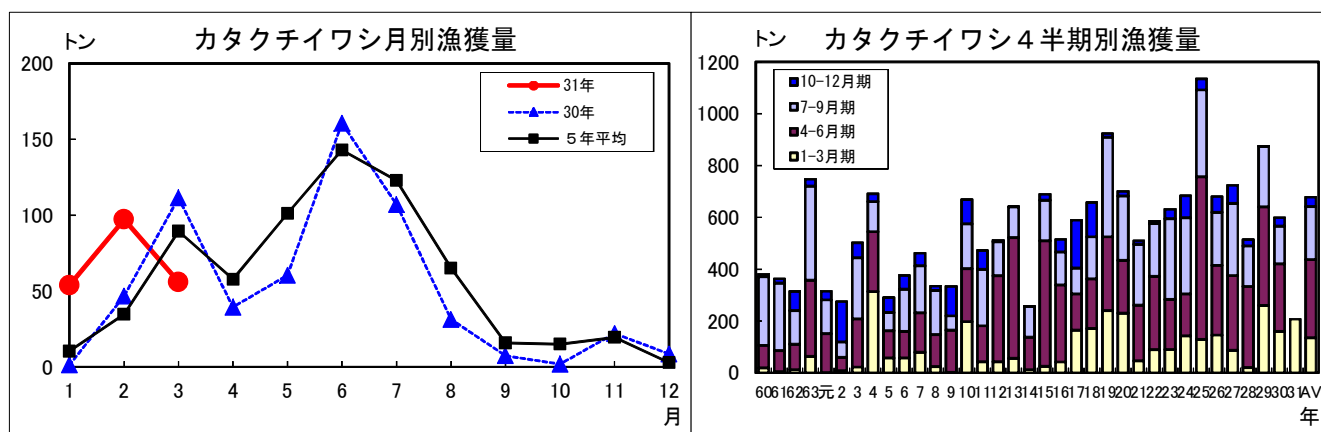


図 カタクチイワシ棒受網漁獲量変化(阿久根港)

※平年値は過去5年の平均値(AV)，平成31年3月27日までの水揚量を使用

[参考：漁況経過のみ記載]

〈ムロアジ類（クサヤモロ、モロ）（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は、平成2年の21,700トンにピークに急減し、平成6年以降は、1,500トンから5,000トンの間での推移しており、平成29年は2,400トンとなりました。

4港計のまき網では、種子島東、種子島北でクサヤモロ中小、小主体の漁場が形成されました。期全体で594トンの水揚げで、前年の96%及び平年の111%でした。

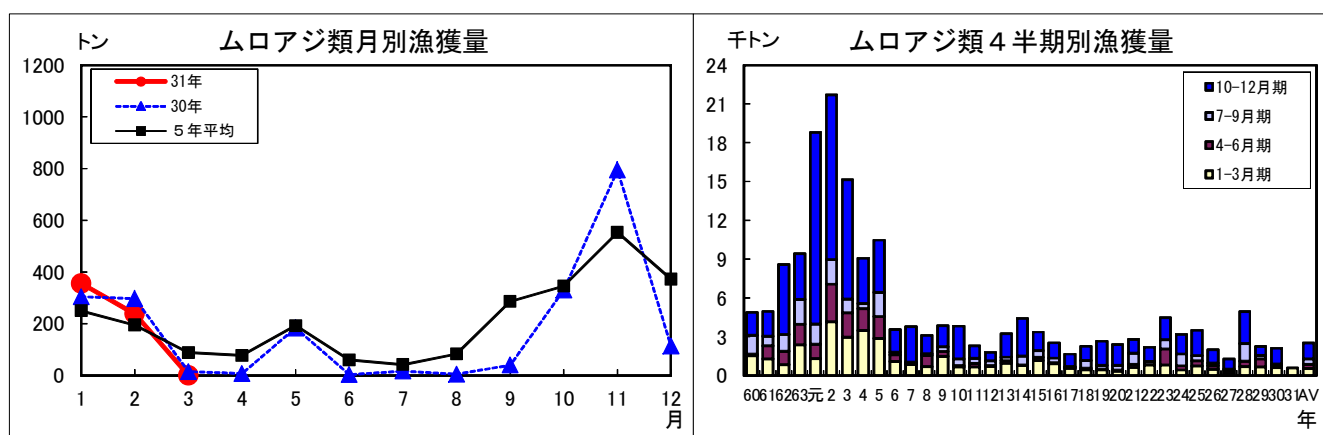


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 平成31年3月27日までの水揚げ量を使用

〈オアカムロ（水産技術開発センター調べ：4港計）〉

県内の平成31年1～3月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は、平成元年の5,300トンにピークに一旦減少し、平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となっていました。平成20年に一旦増加したあと再び減少傾向を示しましたが、平成29年は1,576トンとなりました。

4港計のまき網では、屋久島南、種子島北で小、中、中小主体の漁場が形成されました。期全体で474トンの水揚げで、前年の315%及び平年の101%でした。

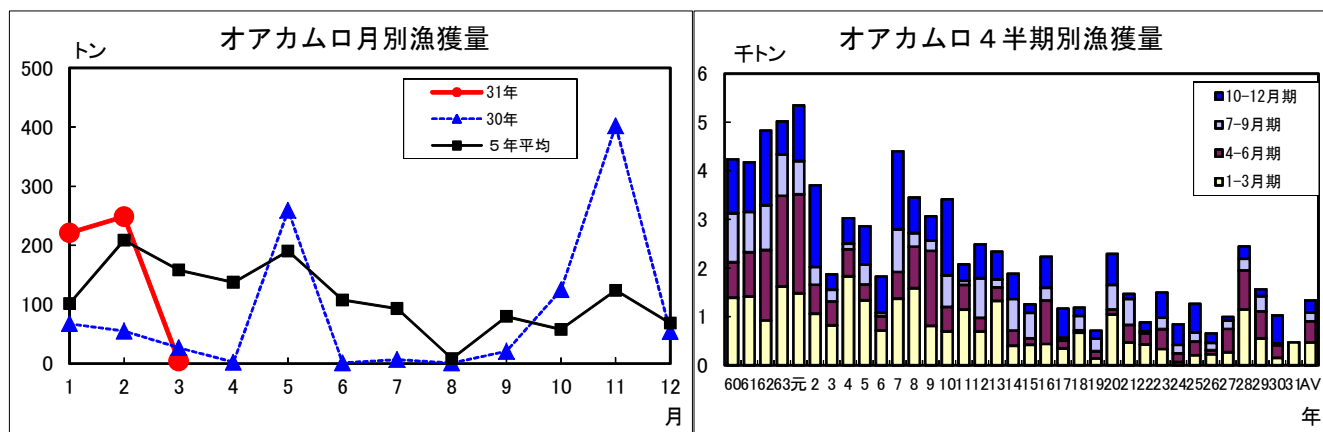


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

※平年値は過去5年の平均値(AV), 平成31年3月27日までの水揚げ量を使用

〈マルアジ（アオアジ）（水産技術開発センター調べ：4 港計）〉

県内の平成 31 年 1 ～ 3 月期の漁況の経過

マルアジの漁獲量は，昭和 62 年から平成元年に 1,500 トンを超えるピークがあり，その後低調に推移し，平成 12 年から 15 年に再度ピークを迎え 15 年には 3,150 トンと最高を記録しましたが，平成 16 年以降は低調に推移し，平成 29 年は 313 トンとなりました。

4 港計のまき網では，野間池沖，甌東で中，大主体の漁場が形成されました。期全体で 163 トンの水揚げで，前年の 91 % 及び平年の 66 % でした。

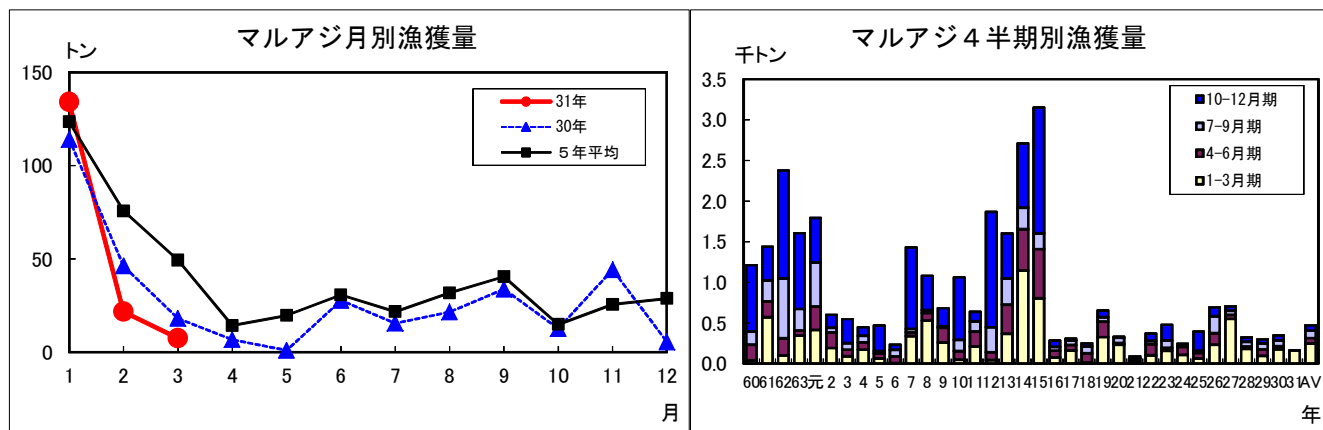


図 マルアジ（アオアジ）まき網漁獲量変化(4 港計)

※平年値は過去 5 年の平均値 (AV)，平成 31 年 3 月 27 日までの水揚量を使用